Vol.813　（月刊）毎月１日発行　Kenko Shinbun　2024年（令和６年）８月１日　無料

新健康協会では、新しい健康法を伝える「健康新聞」を毎月発行し、人間の持つ治癒力や適応力をお伝えしています。肉体的、精神的なことでお悩みの方もぜひ御一読ください。

健康新聞

発行所
発行人　新健康協会
〒813-0001
福岡市東区唐原６－７－１
TEL:092-661-1531
https://shinkenko.jp

次の御論文は、明主様（当協会の教祖）が、昭和二十七年に発表されたものであります。
世界平和と心身共に健全な人間作りを目指す活動に御理解を頂ければ幸甚です。

本教信者の幸福

本教信者の御利益は、余り大きく素晴しいので、つい馴れっこになり、忘れ勝なのは誰も経験するところで、今さら書くまでもないが、それでも気付かない点も色々あるであろうから、ここに書くのである。今日、人間生活上、何が怖いといって、病気程怖いものはあるまい。という訳で医者や薬を頼りにしていない人は、恐らく一人もあるまい。たとえばちょっとした風邪を引いても熱が出る、大儀だ、食物がうまくないという一般症状のほか、ヤレ胸が焼ける、胃が悪いのではないかと心配し、ちょっと腹が痛いとか下痢などあると、硝子か瀬戸物のように、腸が毀れたのではないかと首を傾げるし、少し急いで歩くと息切れや動悸がするので、心臓が悪いのではないかと案ずる。頭痛、頭が重い、眩暈がすると脳の病気ではないかと煩い、目から悲しくもないのに涙が出たり、目が疲れたりすると、眼病の始まりかも知れないと気を揉む。鼻が詰れば蓄膿、臭いが鈍いと肥厚性鼻炎、喉が痛く熱が出ると扁桃腺炎、首肩が凝ると風邪の前触れ、手足の運動が思うようでないと脊髄が悪いのではないか、少し歩くと足が重くなるので脚気かと心配する。かと思うと肛門が痛い、脱肛すると痔だなと顔を顰める。小便の時尿道へ滲みるとか、尿に濁りがあると腎臓結核ではないかと思うのである。というようにザット書いただけでもこのくらいだから、細かに書いたら限りがない。このように、今の人間が病気に対する不安神経質は極端になっている。

まだある。それは黴菌の心配である。ちょっと風邪を引いてグズグズしていると、コジれて、咳や痰が毎日のように出るので、もしかすると肺病の初期ではないかと不安になり、そう思ってみると、この間肺病の友達を病院へ見舞に行ったその時うつったのではないか、でなければ自分の兄弟や父母のうち結核で死んだ人を思い出し、あるいは遺伝かも知れない。手後れになっては大変だから、一度診てもらおうかとも考えるが、だが待てよ、それも考え物だ、もしかして結核の烙印を捺されたが最後、仕事も出来ず勤めも駄目になる。とすれば第一生活をどうする。しかもそうなったら妻や子にうつらないと誰か言い得よう。アア俺は大変な事になったものだ。というようにそれやこれやの心配で、夜もろくろく寝られなくなり、憂鬱に閉じ込められてしまう。そうして誰もそうだが、結核に関する書籍を漁り始め、読み耽るようになる。ところが結核は必ず治ると書いてあるかと思うと、それは表面だけで、その実、恐怖せずにはおれないよう、微に入り細にわたって科学的に説明してある。何しろ現代人は、科学とさえいえば無条件に信用するのであるから、読めば読む程心配は増すばかりである。そうかといって治るにしても何年かかるか分らない。しかもその間絶対安静と来ては何も出来ない。なる程少しの間は貯金や病気手当、保険等で続けられるが、それから先が大変だという心配が離れない。その上医療費も相当かかるから、余程の余裕ある人でない限り、一般の人は病気の心配に輪を掛けるので、二重の悩みとなり、悪化に拍車をかけることになる。

ところが結核ばかりではない。近頃のように色々な伝染病の流行である。たまたま激しい下痢が起こると赤痢の始まりではないか、風邪も引かないのに発熱が続くのはチフスではないかと心配する。特に子供などで元気がなく、生欠伸が出たり、睡がったりすると疫痢ではないか、日本脳炎ではないか、強い後を引く咳が出ると百日咳ではないか、喉がヒューウヒューウ鳴るとジフテリヤ、歩き方が少し変だと小児麻痺か脊髄カリエス、ボンヤリしていると智能低下、太らないと腺病質、眼がクシャクシャするとトラホーム、その他脱腸、食物の好き嫌い、癇癪持ちなど数え上げたら限りがない。

次に近頃の婦人は月経不順、月経痛、白帯下、子宮前後屈、ヒステリーなども多いと共に、妊娠すれば悪阻や妊娠腎も多く、外妊娠、逆さ子、早期出産などもよくあるし、また一般人としては船車の酔い、不眠、耳鳴り、鼻詰り、近視、乱視、便秘、消化不良等々、その他、名の付けられないような病もあるのだから厄介である。というように今日どんな人でも大なり小なり、何らかの病気をもっていない人はほとんどあるまい。としたら四肢五体完全な人間は、地球上ただの一人もないといっても過言ではあるまい。では一体これが人間たるものの常態であろうかということを深く考えてみなくてはなるまい。本来造物主、すなわち万能の神としたら、このような不完全極まる生物を造ったとはどうしても思えないのは分り切った話である。それだのに今日のごとき毀れ物同様な人間ばかりになったとしたら、そこに何か大きな誤りがなくてはならないはずである。

（２面につづく）

浄霊体験記　２ページ　３ページ

- 難病から救われますます元気に…
- 入会して七十四年 多くの奇跡頂く…
- 友人の一言で 私は救われた…

そうしてまた、昔から人間には四百四病の病があるなどといわれているが、現在はもっと増えて千何百という数に上っているそうだから、全く摩訶不思議である。しかもこれで医学が進歩したと誇っているのであるから、全く頭がどうかしているのではないかと言いたくなる。この原因こそ現代医学に一大欠陥があるからで、病気なるものの真の原因が全然判っていず、療法も知らないのであるから驚くべきである。では一体病気とは何ぞやというと、答は至極簡単である。それは体内にあってはならない毒物の排除作用の苦痛であり、毒物とは薬であるから、病気ほど結構なものはないのである。このことが肚の底から分りさえすれば、病気を心配するどころか風邪引き結構、腹下し結構、黴菌は有難いものという訳で、事実病気の度毎に健康は増し、ついには黴菌が侵入しても発病しないという健康者になるのはもちろんである。としたら何と有難い話ではなかろうか。何よりも事実がよく証明している。本教信者になると前記の通り病気は段々減り、年々健康になるのである。ただし稀には死ぬ人もあるが、その人は薬毒が余りに多いため、その排除に暇がかかり衰弱のため斃れるのである。といってもそれは極く僅かで、現在までの統計によれば、結核患者百人中九十三人が全治し、七人が失敗であるという素晴しい成績である。以上のごとく本教信者になれば、いかに幸福者となるかは、多くを言う必要はないであろう。

浄霊によって病苦から救われると共に運命が向上し、幸せになられた方々の体験手記でございます。

ベーチェット病

難病から救われ ますます元気に…

高槻支部　先田博文（50）

私が新健康協会に御縁を頂いたきっかけは「ベーチェット病」という難病にかかったことでした。

発症したのは十八歳、高校を卒業し岡山の音楽大学に入学して、一人暮らしにようやく慣れた頃でした。この病気は人によって症状が違うのですが、私の症状は、まともな皮膚がどこにあるのか分からない程、顔全体に吹き出物（毛嚢炎様皮疹）が出来、絶えず三十七度前半の微熱が続き、胸部や足の付け根等の関節痛、顔に出ている吹き出物が胸部へも出る…といったものでした。この病気は原因が不明とされていて、「病状が進行すると葡萄膜炎になり失明する恐れがある」と医師から告げられました。

治療としては確立されていないため、症状に効くだろうと思われる薬を何種類か処方され、定期検診の時に病状が良くないことを伝えると、その度に薬の内容が変わりました。ようやく症状に合う薬に巡り合えたのか、ベーチェット病の症状が緩和されるようになりましたが、服用を怠るとすぐに元の辛い状態に戻ってしまうので、もう薬を手放せなくなっていました。

異常値が改善 薬も手放せた！

ベーチェット病と診断されてから約二年、二十歳で薬を手放せない毎日を送り、通学と生活のためにバイトはしていましたが、常に体調のことばかり気にしなくてはならず、この先どうなっていくのだろうと不安で一杯でした。

そんな時に、大学で師事していたピアノの先生（前田多津子さん＝会員）が「浄霊を受けてみませんか？」とお声をかけて下さいました。先生には ベーチェット病と診断される前に一度、浄霊にお誘い頂いたことがありましたが、その時はお断りしました。しかしその時とは状況も変わり、これでもし治るのであれば…との思いで試してみることにしました。

初めて浄霊を受けた時は特に何も感じませんでしたが、病気を治したい一心で定期的に浄霊を受けることに決めました。

浄霊を受けながら、今まで知らなかった薬毒の恐ろしさや、病気は体を綺麗にするための浄化作用であること等、色んなことを教えて頂きました。最初は薬を手放せませんでしたが、もし教わったことが本当に良いことであれば試してみるべきだと、意を決して、忘れもしない平成六年八月一日に、今日一日だけは薬の服用を止めてみよう、と試してみました。

薬を止めてみて、どうなるか心配でしたが、一日経っても辛くなかったので、次の日も止めてみよう、次の日も、次の日も…と止めていくと、薬を服用しなくてもやっていける自信がつき、とうとう薬を手放すことが出来ました。

これは浄霊による力に違いないと感激し、二年もの間薬を飲み続けていた日々から解放され、嬉しくてたまりませんでした。その上、浄霊を受け始めて三ヵ月くらい経った頃に、病院での定期検診で変化が起こりました。

検診では毎回血沈検査が行われ、いつも異常値が出ていたのが、この時を境に異常値が出なくなったのです。私はますます浄霊の力に確信を持ち、平成八年五月八日、二十二歳の時に入会しました。

それからというもの、浄霊でますます元気になりました。そしてベーチェット病の症状も段々と消えていきました。

「昔、難病にかかり苦しんでいた時期もあったのですよ」と人にお話しても、信じてもらえない程の健康を頂いています。

手荒れ…皮膚のめくれ…

私は現在、音楽関係に携わる傍ら、接客関係の職場で働いています。ここでは食べ物も扱っているため、手のアルコール消毒を使用します。

コロナ禍以前、アルコール消毒液を使用すると、その副作用からか、手が浮腫んでいました。しかし、コロナ禍以後は接客関係の為にアルコール消毒液に触れる場面が以前の倍以上になったためか手の浮腫み程度では済まされなくなりました。

体のあちこちに湿疹が出るようになり、かなりの痒みの為に、夜はなかなか寝付けないことがありました。その上、冬の寒さも手伝ってか、手荒れがとても酷くて辛かったのです。しかし浄霊を受けることで徐々に良くなり、おかげで大分楽になりました。

また、左足薬指の皮膚が急にめくれることがありました。日に日に他の足指もめくれていき、皮膚がめくれた部分から透明の汁が出て、四十日くらいでネバネバとした汁に変化しました。そして、五十日目で左足の指全部と左足裏の上半分の皮膚がめくれ、黄色くてとても臭い汁が多量に出るようになり、左足の甲も腫れ上がり靴がまともに履けない状態になりました。

痛みが辛くはありましたが、浄霊で救って頂けるという気持ちがありましたので、何も心配することはありませんでした。

すると三ヵ月半程で足の甲の腫れも治まり、その後多量に出ていた汁も出なくなり、気が付いたら新しい皮膚も出来ていて順調に良くなりました。

今回の経験で、より一層明主様の御守護を感じ、感謝で一杯です。

かつて私が難病で苦しんでいたように、色んな病気で苦しんでいる方が一日も早く新健康協会に御縁をいただけるよう願ってやみません。

（兵庫県神戸市）

頭の激痛

入会して七十四年 多くの奇跡頂く…

大牟田支部
齊藤才子（86）

私は明主様に御縁を頂いて七十四年が過ぎ、日々命の継ぎ足しを頂いています。

小学生の頃、川で遊んでいて耳に水が入り、聞こえない状態を治療しても良くならず、困っている時に知り合いの紹介で母親と一緒に新健康協会の支部へ行きました。夏休み中に浄霊を受け、耳が良くなりました。また、そのことがきっかけで一家中、新健康協会に入会することとなりました。私は、昭和二十五年一月一日、十二歳で入会しました。

それからすぐの頃、肘から手先までびっしりとグリンピースのようなデキモノができました。ドクドクと拍動し、手を下げることも出来ない辛さでしたが、浄霊を受けて良くなりました。おまけに以前から患っていた小児ゼンソクまでも良くなり、本当に不思議で嬉しい出来事でした。

その後、二十二歳の時に結婚し、浄霊を受ける機会が少なくなっていましたが、その頃は病気らしい病気もしていませんでした。しかし、四十八歳で夫を亡くしてから更年期障害のような状態になりました。

頭は輪っかがはまったかのように締め付けられ、まるでナイフでえぐり出されるような激痛で精神状態も不安定になり、当時親戚の人から私の娘に「お母さん大丈夫なの？変な電話がかかってくるけど」と言われる程でした。外を歩いている時も「奥さん大丈夫ですか？」と声をかけられる時もありました。

それでも浄霊をよく受けていると徐々に楽になっていきました。ある時、たくさんの鼻血が出て、最初はビックリしましたが、その後、頭がすごく楽になっていることに気が付きました。きっと体の中から不必要なものが出てきれいになったのでしょう…それ以降は激痛もなく、普段通りの生活を取り戻しました。

◇

五十代の時、突然右腕が上がらなくなり、頭では動かしたいと思っても全く動かない状態になったことがありました。足は動いていましたので毎日支部まで通い、二回ずつ浄霊を受け、二十日間で自由に右腕が使えるようになりました。

それから七十歳になる頃のある朝、顔を洗って歯を磨き、口をゆすごうとするけれど口が動かず、突然のことで驚いて鏡を見ると、再度びっくりしたことに、右顔が下がって眉も鼻も口も歪んでしまっていたのでした。その時も毎日浄霊を受け、数ヵ月で良くなりました。娘が浄霊をしてくれたのですが、浄霊を受けていると、バキバキ、ボキボキと音がして、思わず娘に「すごい音が聞こえるでしょ」と聞いた程でした。結局自分だけが頭の中で聞こえた音でしたが、なんとその時に顔の歪みが戻ったのでした。

本当に明主様のお光はすごいと思いました。以前から辛かった頭痛もいつの間にか楽になりました。

いろいろと、激しかった病気も良くなり、年月が経って忘れてしまう程ですが、これは生涯魂に刻んで忘れてはならない明主様から頂いたおかげと感謝しております。

今こうして八十歳を過ぎても元気に動くことが出来、嬉しい毎日です。世の皆さんが、明主様の御光をいただかれ、安心して暮らせますよう心からお念じ申し上げております。

（福岡県大牟田市）

浄　霊

浄霊は、大自然のエネルギーであり、病気やあらゆる問題で苦しんでいる人、悩んでいる人を救う方法です。

浄霊によって魂は清浄化され、肉体が健康になっていきます。

まずは試されてみてはいかがでしょうか。

ネパール

友人の一言で 私は救われた…

バネパ支部
ラザン・スレスタ（53）

私は今から三十一年前、二十二歳の時、左膝に柔らかいデキモノが出来ました。特別何かをした…という訳ではなかったので、何故こんなデキモノが出来たのか分からなかったのですが、デキモノに触ると痛みが走りましたので、病院に行き検査をしました。するとお医者さんから「このデキモノは手術して取らないといけない…」と言われました。しかし手術をするにも費用がかかるし、手術をしないで何か良くなる方法がないものか…と色んな人に話を聞きました。

するとある友人が、「新健康協会で浄霊というのがあるから行ってみたら良いよ」と教えてくれました。私は色んな方法を試したいと思っていましたので、早速バネパ支部に行くことにしました。

それから数日間、浄霊を受けていると、デキモノに触っても痛みが走ることがなくなり、段々と落ち着いてきましたので、更に浄霊を続けることにしました。

デキモノだけでなく 胃のもたれも良くなる…

それからというもの、日毎にデキモノの腫れが引き始め、目立たなくなっていきました。そして浄霊を受け始めてから半年後、デキモノは完全になくなり、左膝はきれいになりました。その後も浄霊を続けましたが、それ以降デキモノが出来ることはありませんでした。この素晴らしい結果に、心から明主様に感謝しました。

すると、デキモノだけでなく、胃のもたれも良くなっていることに気が付きました。以前は食事をすると胃が重くなり、気持ち悪くなることが多々ありました。それが浄霊を受け始めてからなくなり、食事も美味しく頂けるようになったのです。本当に不思議でした。デキモノが良くなっただけでなく、胃のもたれも良くなるという素晴らしい体験をしたことで、私の神様に対する信仰心が高くなりました。

◇

一九九六年一月十九日、私は今後も浄霊を続けていき、多くの方に浄霊の素晴らしさを伝えたいと思い、二十四歳で入会しました。私は友人が浄霊を教えてくれたことで救われました。

この素晴らしい浄霊を一人でも多くの方にお伝えし、救われる人が増えることを願って体験談を書かせて頂きました。

誠に有難うございました。

（ネパール・バネパ）

美の世界

美によって人間の情操を高め、生活を豊かにし、人生を楽しく意義あるものにすることができます。

十四代 中里太郎右衛門「唐津奥高麗茶盌」

十六世紀末から代々継承される唐津焼の陶工、中里太郎右衛門。伝統技法を復活させた十二代、唐津焼の復興を十二代とともに支え、調査研究を進めつつ現代的な図案も作陶に取り入れた十三代、そして一九五七（昭和三十二）年、十三代の長男として生まれた当代が、本作の作家、十四代中里太郎右衛門です。

武蔵野美術大学で彫刻を学び、大学院修了後は多治見陶磁器意匠研究所、国立名古屋工業技術試験所で釉薬について研究。一九八三（昭和五十八）年から中里太郎右衛門の工房で作陶を始めると、翌年の第十六回日展にて叩き青唐津手付壺「貝緑」が初入選を果たします。さまざまな展覧会での入選や入賞で実績を重ね、一九九〇（平成二）年第二十二回日展で「焼締壺90」で特選を受賞。二〇〇二（平成十四）年に中里太郎右衛門を襲名しました。

襲名前の公募展では斬新なフォルムの大作を中心として活躍し、堅実な伝統技法をもとにしつつ、特に「形」において唐津焼の新たな可能性を大きく広げました。一方、古唐津の本質を捉えようとする器の数々をも手がけており、本作も襲名前につくられたそんな作品の一つと言えるでしょう。

古唐津の代表的な古窯のなかに「山瀬」があります。現在唐津市浜玉町に属するこの地の陶土を使って制作されたこの作品は、持つには手のひら全体に渡りそうな、少し大ぶりで深さのある佇まいに、細かな貫入がつくりだす繊細な模様が良い対比をなしています。来歴としても、ある高名な茶人が購入し、煮立てた湯に浸してしばらく屋外に置くという過程を経て柔らかな色味を得たそうです。その後十数年してから手元に買い戻したとのことで、長年の茶渋の染み渡った奥行きのある景色が生まれています。

貫入は釉薬と素地との収縮率の差によって、焼成後の冷却時に生じる釉のひび模様ですが、山瀬の土はこれが起きやすいと言います。そうした特性を踏まえて選ばれた土でも、十四代は貫入をイメージ通りにコントロールすることを意図しているわけではなく、たくさんの偶然を豊かに取り込んでできる自然の姿を楽しんでいます。襲名して二十年を超えた今なお「使う」ことを大事にし、何事も刺激として作陶を続けています。

解説　松田愛子

中里太郎右衛門大展覧会開催

「古唐津」とよばれる十六世紀の古陶に始まる唐津焼。豊臣秀吉の文禄・慶長の役によって、大陸よりもたらされた技術と文化がいちはやく花開いた地、唐津。そのとき以来、連綿と朝鮮陶工の技術を今に受け継ぎ、さらにそれを発展させて現代の生活に合った作品づくりを続けてきた中里太郎右衛門家。

本展では古唐津や、藩により厳しく統制され、門外不出の技法で作られた幻の唐津焼「献上唐津」に加え、中里家五代直筆の古文書、また十二代太郎右衛門中里無庵と交友関係のあった陶芸家の荒川豊蔵、日本画家の伊東深水、洋画家の中川一政らの書簡など、中里家秘蔵のコレクションを展示致します。

国内窯業史に大きな革新をもたらした唐津焼。その唐津の地に生きた朝鮮陶工たちの知られざる記録。中里太郎右衛門家約四百三十年の歴史を辿る展覧会となります。

場所：新健康協会　晴明会館

会　期：令和6年6月18日～9月16日
時　間：10時～17時
（最終入館16時30分）
休館日：第1、第2日曜日、
月曜日（祝祭日の時は翌日）

お問い合わせは晴明会館まで
電話：(092)661－1535